

ココロ踊る！山麓生活のスヌメ(第20回)

わが家のサンつがる

2022.11.18

2年前、庭に2本のリンゴの木を植えた。そのうちの1本は「つがる」という品種。同時期に植えたパートナーの「ふじ」が折れてしまったため今年は受粉ができず、実らないだろうと思っていた。しかし、花が終わったあとに観察すると受粉に成功した様子の子房が5つあった。小さな子房は1カ月ほどでピンポン球大になり、夏に向かって実がぐんぐん成長していった。そして、秋にはついに……？



2022年6月に撮影したリンゴ。実が小さいうちは軸が上を向いている

めざせ！甘い「サンつがる」

2022年5月末、リンゴ「つがる」の木に実の元になる子房が5つ付いていたときの喜びは、本コラム第15回「希望のリンゴの木」でお伝えした。今回は、その後の経過をまとめてみようと思う。

リンゴの実の成長に希望が持てたころ、父母も「家族5人だから1つずつ食べられるかな？秋が楽しみ」と期待していた。昨年は何度か殺虫・殺菌剤の散布をしたけれど、実がなりそうな今年は、無農薬で育ててみようということになった。ちなみに、リンゴの色付きをよくしたり病気を防いだりするために、実に袋がけをして栽培する方法もある。しかし、袋がけをしない方が糖度は高くなり、太陽を浴びて育った「ふじ」は「サンふじ」、「つがる」は「サンつがる」という呼称で出荷されるそうだ。わが家でも袋がけはせず、「自家製サンつがる」をめざす。

「病気になったり動物に食べられたりすることなく、大きく育ってくれるといいね」と言いながら、家族で成長を見守っていた。でも、やっぱり予想外の出来事は起こる。

天敵は身近なところに…

7月のある日、庭で遊んでいた2歳の息子・ガクが突然「リンゴ、とったよ〜！」と言いながら、私の元へ駆け寄ってきた。「え？！」と驚いて振り返ると、ニコニコ顔のガクの手に、未熟なリンゴの実が2つ握られている。ちょっと目を離した隙に、低いところにあった実をもぎ取ってしまったのだ。「うわあ、5つしかない大事なリンゴが」と凍りつく。

「コラ〜！」と怒りそうになったけれど、瞬間的にこらえる。ガクはよかれと思ってリンゴを採り、「すごいね」と褒めてもらいたい

に違いない。ここで感情任せに怒ってはいけない。心に菩薩の仮面をかぶり「リンゴを採ったんだね。でも、赤くなってから採って食べた方がずっとおいしいと思うよ」と諭す。

ガクは理解できないようだけど、リンゴの実を小さな手で転がしたり、お気に入りの長靴に入れたりして遊ぶのを見ているうちに「まあ、いいか」と気持ちが静まった。それにしても、リンゴの敵は虫でも動物でもなく、一番身近なガクだったとは。



ガクが未熟な実を採ってしまい、7月に2つ失う

赤く実った残りのつがる… 続きを読む